

かがやき

令和6年 2月 6日(火)
多摩市立連光寺小学校
特別支援教室 かがやき学級
学級通信 NO. 14

「第三者」「自分事」の視点から見ると/ 小集団指導での振り返り

一月が過ぎ、大人目線から見ると逃げる二月です(子供時間が長く、ゆっくりなのは不変なんだろうなあと子供たちの生活を見ていると感じますが…)。ただ、やはり一年を過ごしてきた各グループの子供たちをみると、そこには大きな成長を感じます。

先日の二年生の小集団指導では、「こまったときにどうする?」というテーマで意見を共有しましたが、その時の子供たちの反応から特にそう思いました。この時間、SSTのワークシートから事例を出すときもありますが、自分にとっての「あるある」に、より忠実に寄り添って考えられるように、この日は匿名事例として架空小学校の一年生の事例を紹介しました(子供の反応によってフィクション要素を入れることもあります)。子供はこうした現実味のある事例(教室で何かトラブルが発生したときにいきなりクラスに自分事としてのスイッチが入る瞬間みたいな感じがありますが、その感じです)には敏感に反応していました。「A君は体育が苦手らしい。やりたくない!いやだ!着替えたくない!つまらない!」と言っていつも体育に参加することができないらしいんだ。「A君はどうしてやりたくないんだらう?困ったなあ…。」「二年生のみんなはどう思う?」このような形でグループの中で子供たちに呼びかけます。自分事スイッチが入った子供たちは「寒いんじゃない?」「気分的につかれていたんだよ!そういうときもあるよ。」「着替えるのが恥ずかしいのかも…。」「体育で失敗して笑われるのが嫌なんじゃない?」と発言のスイッチが入ってきます。そして、「一年のときのぼくと似ている…。」という自分の歴史に言及していく子供も出てきました。今「第三者」としての冷静な目と、かつて「当事者」としての目とで、この事例を見る中で子供たちの発言の中身はより具体的になっていきました。

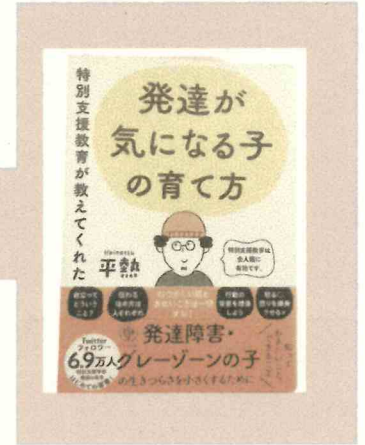
「じゃあどうしたらいいんだらう…。」「まずは先生に理由を言えば」「つかれてるから休みたいとか」「着替えも他の部屋で一人で着替えればいいんじゃない?」「笑われるのは確かに嫌だよ」等、自分の経験も踏まえた発言からは「振り返り」のレベルが成長したことを大きく感じました。身近な事例をみんなで共有し、振り返り、意見を言う。そこで発見した「気づき」をさらに自分にフィードバックしていく、そんな成長を感じた場面でした。



かがやき学級文庫・本の紹介

「特別支援教育が教えてくれた発達が気になる子の育て方」 著者 平熱 (Heinetu) かんき出版

特別支援学校で働く現役の先生が「特別支援教育は全人類に有効です」と銘打ち、わかりやすく多様な視点や価値観で、特別支援教育について大人や子供に、ヒントをたくさん教えてくれる内容になっています。「どうしてできないんだ!」じゃなく、「どうやったらできるかな?」を考えていく特別支援教育ってさいこうじゃない?」平熱先生の言葉に共感です。(Twitter フォロワー6.9万人)



ぼくがっこう 谷川俊太郎 文/はたこうしろう 絵
学校にいる「ぼく」が見ること感じることを通して、成長する姿が描かれています。友達のこと、学校に行きたくない日のこと、やがて卒業すること等、イラストから気持ちの変化を見つけたり、自分に重ねて考えたり、そんな学びを感じることがができます。